

高木佳子歌集

『玄牝』

(砂子屋書房)

生れしめむと身をよちるとき重たかる
胞衣も生みゆく玄牝この地

人々の営み、世の中や自然界のあらゆる
ものが生み続ける豊穡と混沌。そのカオス
を、後産が娩出する胞衣に喩えた力作から
タイトルを取る。

しかたなく此処にある女どうしても此
処にある我が同じ土搔く

作者は福島県いわき市在住。東日本大震
災以降、除染、訴訟、デモなどを通し、生
きることを見つけてきた。

それぞれの重みに砂は耐へかねて己を
すこしくばませてゐる

生きながら生き永らふることを思ふ万
年筆はインク充ちつつ

現実の事柄を自分自身の内側に取り込み、
熟成させて詩に置き換えた作品が印象的。
写実の歌にも心理の投影が色濃い。

子の腕の去にたるのちの盥水しづかな
る陽を容れてをりたり

詠む対象を絞り、硬質な韻律を主軸に、
文語で表現する作品から、厳肅な作歌姿勢
が伝わってくる。

(伊沢 玲)

笹本碧歌集

『ここはたしかに(完全版)』

(ながらら書房)

享年三十四歳、遺歌集である。活きいき
と仕事に邁進する眩しい歌が続く歌集の中
盤で、突然に影が落ちる。

受けとめるカタチしている奥歯噛み
告げられている癌のあること

癌宣告、闘病の苦しい状況で、命と向き
合う冷静な信念がある。闘病の末、職場復
帰した矢先の急変に悔しさが滲む。自身に
残る時間を詠む歌には胸が締め付けられる。

悲しみのピークは過ぎてまじまじと観
察している頭の形を

うすみどりの満月そそぐ駐車場ここか
ら帰れる人々のため

天文学に造詣が深い作者が「詠う」こと
は、地球を残すことでもあったという。特
に宇宙の中に生きる命の歌に惹かれた。特
に月面より呼ばれる心地手術室八に入っ
たはずの吾だが

この星を離れる日にも見てみたいこん
なに赤い夕焼け空を

今後も憧れた地球を詠い続けて欲しいと
願う人が多かったはず。苦しいが美しい歌
集である。

(椎名 恵理)

工藤吉生歌集

『世界で一番すばらしい俺』

(短歌研究社)

有耶無耶の曖昧模糊をただよってなつ
かしいなあこの世のからだ

五十秒くらいもがいて立てる気がして
立とうとして立ったら立てた
力の限りがんばりますと言わされて自
分の胸を破り捨てたい

学生時代には投身自殺に失敗し、車にも
はねられ、社会との折り合いもうまくつか
ない。難易度高めの人生をどこかユーモラ
スで冷静なメタ視点によって切り取る。気
負いのない脱力感が作者の強みであり、読
者にとっての救いだ。

憎しみを社会に向けてひとに向け自分
に向けてそこで落ち着く

自らを卑下する言葉は強者への牙でもあ
り、弱者への共感でもある。

膝蹴りを暗い野原で受けている世界で
一番すばらしい俺

歌集タイトルにもなった一首。真っ直ぐ
な言葉の端々から滲み出るアクの強い自我
の発露に作者の息づかいが聞こえてくる。
「誰にも知られることのない逆転大勝利」
を見た思いだ。

(松井 竜也)